



TITLE:

参観交代制度ノ經濟觀(二)

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 参観交代制度ノ經濟觀(二). 經濟論叢 1917, 4(4): 521-540

ISSUE DATE:

1917-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127190>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

經濟論叢

第四卷 第四號

大正六年四月一日發行

論說

Unto this Lastヲ讀ム(一).....法學博士 河上 肇

官業問題ニ就キテ(三、完).....法學博士 神戸 正雄

我取引所擔保業務ト保險事業トノ差異.....法學士 小島昌太郎

太閤檢地ノ研究.....法學士 牧野新之助

參觀交代制度ノ經濟觀(二).....法學士 本庄榮治郎

時事問題

支那ノ立國策ト其參戰問題.....法學博士 戸田 海市

對印爲替問題.....法學博士 神戸 正雄

雜錄

世界金融ノ中心トシテ倫敦ノ地位.....法學博士 神戸 正雄

續市統計所小觀.....法學博士 財部 靜治

歐米ニ於ケル勞働組合ノ近況.....法學士 山本美越乃

長野縣ノ蠶絲業.....法學士 河田 嗣郎

參觀交代制度ノ經濟觀 (二)

本庄榮治郎

四、參觀交代制度ノ變革

徳川ノ初世、諸侯ヲシテ年次ヲ以テ江戸ニ參觀ノ禮ヲ致サシメ、府内ニ邸第ヲ賜ヒテ妻子ヲ收容シ、之ヲ以テ陰ニ質タラシメシコトハ、大小諸侯ヲ駕馭統御スルノ策トシテ間然スル所ナク、幕府ノ紀綱ヲ張り、霸權ヲ確保スルニ遺憾ナキ制度ナリシカ如シ。而モ交通不便ノ當時ニ於テ大小諸侯ガ、ソノ家格ニ應ジテ必要以上ノ從者ヲ具シ以テ威容ヲ嚴ニシ、長刀毛槍先挾箱ノ儀衛ヲ整ヘテ東西數十百里ノ間ヲ上下セシコトハ、彼等ヲシテ疲弊セシムルコトノ大ナリシヤ、蓋明カナラン。⁽¹⁾東潛夫論ニ『諸侯ノ國大小異ナレドモ大抵貢賦ノ半ヲ以テ公用ニ給シ、半ヲ以テ臣下ヲ祿ス。慶元ノ頃ハ是ニテ事足リシナリ、近來ノ諸侯ハ多ク臣下ニ半祿又ハ三分ノ二ヲ與フ是古公用五千石アリシ國、六千六七百石ヨリ七千五百石マデヲ用ユルナリ。』⁽²⁾トイヒ、不恤緯ニ『諸侯以家在江戸、各皆營築其數區第宅、使令其多少臣妾汎汎然寄居於其中、則大抵其衆、居其藩之十二、而金穀之費、居其藩之十七。』⁽³⁾トイヘルカ如キ、何レモ其藩國ニ於ケル收入ノ半以上カ參觀交代及在府ノタメニ費サレシヲ見ルヘク、財ヲ糜スルコトノ甚シカリシヤ、以テ徴スベキ也。ココニ於

(1) 小林庄次郎、幕末史、20頁參照
(2) 日本經濟叢書二十六卷、436頁
(3) 蒲生君平全集、357頁

テカ參覲ノ制ヲ弛メテ以テ諸侯ノ困憊ヲ救ハンコトヲ論スルモノアリト雖、之レカタメニ制度ノ根本精神タル列侯ノ統御ヲ紊リ、幕威ノ衰頹ニ歸センコトヲ慮リテ遂ニ無用ノ辨、架空ノ説トナリ了レルモノ少カラス。カノ吉宗將軍ノ企テタル享保ノ改革ノ如キハ最モ明カニコノ旨意ヲ示スモノニシテ、隔年交代ノ古法ヲ維持シ且十年ノ後ニ於ヒテ全然之ヲ復舊スルニ至リシ也。又幕末ニ及ンテ改革スル所ノモノハ幕府ノ威勢衰頹シ、舊制ヲ支フルヲ得サルニ至リシカ爲メニシテ固ヨリ自然ノ大勢ノミ。必スシモ制度ノ本質上ヨリ生スル弊害ヲ除去センカタメニ之レガ改革ヲ企テシモノニ非ル也。今此等享保文久ノ二大改革ヲ論スルニ當リテハ、當時識者ノ改革是非ノ意見ヲモ合セ考フルコトノ頗ル興味アルヲ覺ユルヲ以テ爰ニハ事實ト學說トヲ合セ説カントス。所謂學說ニハ之ヲ始メニシテ蕃山、徂徠、鴻臚(明曆、享保)アリ。之ヲ中ニシテ樂翁、竹山、惟孝(天明、寛政、天保)アリ、終ニ春嶽、小楠(安政、文久)アリ。以テ徳川中世以降ニ於ケル改革是非意見ノ一斑ヲ見ル可シ。必スシモソノ全豹ヲ窺ヘルモノニハ非ル也。

一、熊澤蕃山ノ説。中央集權策トシテノ參覲交代ノ制度ハヨクソノ目的ヲ達シテ諸侯ヲ制御スルニ足リシト雖、而モ諸侯ハ之レカタメニ疲弊シ、尙餘裕アルニ於テハ更ニ御用金御手傳等ヲ命セラレ、ソノ窮乏愈甚シク、民ニ取ルコト極メテ重シト雖、猶足ラサルヲ常トスルニ至リ、幕府ノ政策ハ漸ク其利ヲ盡シテ其弊ヲ顯ハサントス。蕃山乃チコノ時ニ中リテ説イテ曰ク

『或問。諸大名困窮スレバ勢ヒナクシテ公儀ノ御爲却テヨシト申説アリ、シカルニ諸國トモニ富有ナルベキ政ハイカヤ。云。

諸侯不勝手ニテ武士困窮スレバ民ニ取事ツヨクテ百姓モ困窮ス、士民困窮スレバ工商モ困窮ス、シカノミナラズ浪人餘多出來

ヲ飢寒ニ及ビヌ、是天下ノ困窮也。(中略)シカラハ諸大名ノ困窮ハ上ノ御爲アシキ第一ナリ。シカルヲ御爲ヨシトイヘルハ伯術ニシテモ分別ヲサキ事ナリ、右大將家北條足利ハ伯者ナリ、中ニモ北條チヌグレタリトス。諸大名ノ在鎌倉三年ニ一度五十日ト定メテソレサヘ鎌倉ニテ費多カラヌヤウニト戒シメラレタリ、諸國ノ潤澤チ鎌倉ニテカラサン事ヲ恐レテナリ」⁽⁴⁾

是レ即チ參觀交代ノ利ヲ寬ニシ以テ諸侯ヲ休養センカタメニ北條氏ノ時ニオケル參府ノ制度ヲ採用センコトヲイヘルモノニ非スヤ。然ラハ今鎌倉時代ノ制度ニ倣ヒ『諸大名三年ニ一度ノ參勤、在府五十日六十日』⁽⁵⁾ト定ムルモ果シテ諸侯背叛ノ虞レヲ生スルコトナキ乎。曰ク

『鎌倉ノ時代ハ器量アル大名アリ、氣遣ヒナル大身モ多カリシダニ、人質モナク三年ニ一度五十日ノ在府ニテ何事モナカリキ。北條ハ九代マテツヅキ足利家ハ十四代ナリ。十代已後ハ名バカリニテ流寓所ナシトイヘドモ誰モ公方ニ向テ敵スル人ハナカリキ。況ヤ御當代天下 同ニシテ江戸ニ諸大名ノ母儀奥方子達アリ、其上氣遣ヒナル人ハナシ、何チ憚リテ天命ノ大吉ヲ取給ハテ居ナガラ大凶ヲマテ給ハンヤ。ソノ上公儀ヨリ在府チ少クシ給ハバ御恩惠ト成テ辱ク思ハレ心服ノ本トナラン、諸侯ノ勝手詰リ參府ナラズシテ下ヨリ申テユルサレナバアシキ事ナカルベシ。如此ノ世間アマタノ善行ハ江戸詰チユルシ給フ所、仁政ノ大本ナリ』⁽⁶⁾

當時兵農全ク分離シ武士ハ城下ニ安居シテ驕奢ヲ事トシ、賦歛頗ル重シト雖、而モ自ラ養フニ足ラス。蕃山乃チ農兵制度ノ昔ニ歸ルヘキ事ヲ主張シ、武士ヲ散シテ民間ニ土着セシメ、士ト民トヲ分タスシテ十一ノ貢ヲ上ラシメントス。參觀交代制度ヲ寬ニスル所以モ亦コノ農兵說ニ因ル也。然ラハソノ農兵說ハ如何。

『諸大名在江戸三年ニ一度五十日ノ古法ニカヘシ給フトモ、タゞニカヘシ給ハバ國々ニテ私ノ養生シ、東ニ滅シ西ニ生ズルゴトクナラバ何ノ益モアルマシ、親子ノ所帶チ下知スルゴトク公儀ヨリ下知セラレバ前ニ云所ノ仁政行ハレ事調テ後又餘リテ糧所ナキ米穀ヲ以テ、農兵ニ返シ給ヘン事易カルベシ。是ハ士モ民モ悅ブヤウニナクテハカヘシガタシ。先民間ノ借物返シタマ

(4) 大學或問、日本經濟叢書第一卷、150頁

(5) 同上、142頁

(6) 同上、142頁

ハリ、質ノ田地取返シ、賣タル田地モ上ヨリ元銀ニテ質戻シ給ハルベシ、是賣タルモノ田畠多クハ、賣タル者ノスグナキ方へ給ハルベシ、若シ賣タル者田畠猶多ク、買タルモノ少ナキハ、其ママ買タルモノノ地ト成ベシ、其上ニ土ナ民間ニ入サマニ成テ、民ニ免一寸ユルシ給フベシ、如此自然ニ高免ニ成テ民ノ悔タルハ、土トハナレタル故也。土ノ在々ニ在付ヤウニスベシ、又土ノ心得ニモ此後子々孫々生死ヲ共ニスル譜代ノ民ナレバ民ノ爲アシカラヌヤウニタシナムベシ。軍役ハ民ヲツレテ出ル事ナレバ常ニ人ヲ多クハカヘ置カズ、二ツ成ニテモ三ツ成ニテモ足ルベシ。使番モナク公用ノ勤モナシ、同村隣里ノ土ト往來スルニモ臺所へ入テカタル様ニ成ナレバ客ニ人ツカハル事モナク、少ツツノ手作リスレバ菜園ノ草ヲ取ヤウナル事、獄ノ養生ニ下人ノ手傳ヒシ、山野ニ獵シ川澤ニ漁シ、風雨霜雪テイトハズ、文武ノ藝ヲツトメ、君ノ干城トナルベキ武夫ナラン、クハシキ事ハ其時ニアタリテ制法アルベシ、高知ノモノノ子多キハ子供ニワカチテヨキホドノナミ出來ヌベシ子々孫々ニ至リテ士共ニ作人トナリテ十一ノ貢ニ歸スベシ。(中略) 今高拾萬石ノ城主、中分ノ知行ニスレバ五ツ物成ニテ五萬石納レリ。十一ナレバ一萬石ナリ。五分一ニテ足ルベキ歟。云。五萬石ノ納米チ家中ノ知行四ツ物成ニツカハシ、其外扶持切米ニ出セバ漸ク藏入ハ一萬石許ナリ、ソレニテ在江戸ノ用ニアツレバ不足、借銀スレバ父利分ニ出テ愈足ラズ、後ニハ家中ノ物成ヲ借取ハ限ナドチ出ハナドサマザマノ不仁ノ仕置出來ルナリ、仁政行ハレ在江戸三年ニ一度五十日ノ昔ニカヘレバ一年ニ千石ツ、餘シ置、三年目ニ三千石ニテ幕府ノ用餘リアリ、一年ニ九千石ノ藏米ハサノミ入ベキ事ナシ⁽⁷⁾。

カクテ農兵ノ制度行ハレタル後十一ノ貢ヲ以テ果シテ幕府ノ費用ヲ支フルコトヲ得ヘキヤ。曰ク

『今ハ諸侯ニ給テ諸侯ノ益ニモナラヌ事アリ。又上ニ奉リテ上ノ益ニモナラザ下ニテ財ノ費ル事アリ。カヤウノ事ハ上下トモヤメ給フベケレバ公儀ノ不足アルベカラズ、若不足ナラバ古法ノゴトク、在國二年ニ五十分一ノ貢ヲ取給ハレイカヤウノ事モ調フベシ。納米一萬石ヨリ米二百石ノ貢物ナリ十萬石ニ二千石ナリ。外ニウキ物成ノ貢アリ京大阪駿府等ノ在番モヤムベシ、神佛ノ寺社モ數ヘクナク修理ニテ調ベケレバ公儀ノ入用多クハアルマシ、其上有道ノ代ハ道アル入用ナレバ萬一公儀御不足ノ事アラバ諸大名ノ相談ニテイカヤウニモ足給フ様ニナルベシ。諸大名六分ノ公用ヲユルサレ給ヘバ貢少シ多ク奉リ給フトモ不足アルベカラズ、上ヨリ諸侯チ子ノゴトクシ給ヘバ諸侯モ上チ父ノ如ク思ヒ給フベシ』⁽⁸⁾

(7) 同上、151-152頁

(8) 同上、153-154頁

之ヲ要スルニ彼ノ農兵策ハ從來ノ政策ヲ擲チテ諸侯ヲシテ國ニ就カシメ、武士ヲ鄉村ニ歸セシメ僅ニ十一税ヲ徵スルニ止メ、以テ諸侯及民力ヲ休養セシメントスルモノニシテ、若シ之レニヨリテ公儀ノ費用ヲ償フニ足ラサル場合ハ在國二年ニ對シテ五十分一ノ貢ヲ諸侯ヨリ上ラシメントスルモノ也。是レ舊ニ參覲交代制度ノ改正ノミニアラス、實ニ當時ニ於ケル政治社會組織ニ一大改革ヲ試ミントスルモノトイフベキ也。

二、获生徂徠ノ說。徂徠ハソノ著政談ニ於テ說テ曰ク

『御當家ニ於テ諸大名ヲ御城下ニ聚置ルルコト是東照宮ノ神慮ヨリ起リ、亂ヲ制スル控綱也。去ドモ上下如此困窮シタル其果ハ諸大名勦ク力モ無ナリテ其困窮眞實ニシテ僞リ無ンハ自ラ參勤ヲ不免シテ不叶コトニ成ベシ。參勤ヲ免サレタリ共、上ノ御威光ニテ當分ハ何事モ有マシケレドモ、是法ノ敗ルル所ナレバ至極重キ法サヘ敗ルル上ハ何事モ埒モ無ケニ成テ果ハ言語同斷ニ可成也』⁽⁹⁾

サレハ參覲交代ノ制度ヲ全免スルコトヲ得スト雖、諸士ノ困憊ハ之ヲ救済スル所ナカル可ラス。而モ諸大名ノ困窮スル所以ハ主トシテ隔年ニ江戸ニ參覲スルニ因ルモノナルカ故ニ⁽¹⁰⁾參覲交代制度ニ就テソノ一部ニ改正ヲ加フル必要アルハ明カ也。曰ク

『總シテ大名ノ第一トスヘキコトハ、家中ノ治メ民ノ治メナ善シテ身帶ヲ腐切ラズ、武備ヲ不失末永ク參勤交代ヲ勤メテ上ヲ守護シ奉ル事也、擬平日公儀ノ勤ヘ大格サヘ違ハスンバ、些少ノ事ハ人々ノ了簡次第ニテ少クトモ遅クトモ少シ出入有テモ苦カルマジキナ事成ニ、何事モ本ヲ取失ヒ只傍ヲ聞合セ一統ニスル風俗成上、御年寄ドモノ取捌モ心得違多キ故留守居無テハ叶ハズ其家ノ家老モ樂ナ好テ主人ヲ太切ニセヌ故留守居ヲ立居テ公邊ノ勤ニハ構メ也。如此仔細ナルニヨリテ大名ノ身上ノ儉約、今ハ爲ベキ様無ナリタル也、昔ハ大名ニ物ヲ遣スコト上策ナレトモ今ハ諸大名ノ困窮至極ニ成タレバ身上ヲ能保テ永々參覲交

(9) 日本經濟叢書第三卷、385頁

(10) 同上、403頁

代ノ成ル様ニスルコト是當時ノ良策ナルヘシ、其仕方ハ是モ公儀ト同斷ニテ其國ヨリ出ル物ヲ直ニ取用テ金ニテ物ヲ調ベヌ仕方有ベシ、家中ノ武士ヲハ皆知行所ヲ割吳テ面々ノ知行所ニ居住シ、城下ヘ勤番スル様ニシ、サテ參勤ノ節召連ル人數ヲ除外ニ減少シ御城下往來ノ供廻モ隨分ニ減少シ奥方ノ作法ヨリ始リ其身ノ持續ノ衣服飲食器財家居、人ノ使様、音信贈答使者ノ次第、冠婚喪祭ノ禮迄其官位知行高ニ應ジ、何レモ隨分物入少ク、取續キノ成様ニ積リテ上ヨリ收テ制度ヲ立玉フベキ事也、公儀ニ計制度ヲ立テ、夫ニ可準邦ト有様成事ニテハ今迄並ヲ見合仕來タル事既ニ格ト名ヲ付タルナレバ公儀ヨリ新ニ制度ヲ立玉ハ子バ中々破リ難事ニテ是ヲ不破シテハ諸大名ノ身上ハ直ルベカラサルコト也⁽¹¹⁾

即チ一方ニ於テ武士ヲソノ知行所ニ土着セシメ之ヲシテ成ルヘク自然經濟ヲ行ハシメ、以テ貨幣經濟ノ廣ク行ハルルカ爲メニ商人ニ利益ヲ壟斷セタルルノ弊ヲ防クト共ニ、他方ニハ參覲交代ノ從者ヲ減シ、奢侈ヲ制セントスルニ在リ。然レトモ單ニ從者ノ數ヲ減スルノミニテ參覲ノ期間ヲ變更スル所ナク隔年交代在府在國一年ノ舊制ヲ固守スルニ於テハ武士土着ノ法モ實ハ形式ニ過キサル空文トイハサル可カラス。徂徠ハコノ點ニ於テ如何ナル考ヲ有セシカトイフニ『扱武家知行所ニ住居シテハ江戸ノ勤番ハ一月替トカ百日替カニ相勤ムベシ』⁽¹²⁾トテ在府期間ノ短縮ヲ説キタリト雖、而モ參覲ノ度數ニツイテハ蕃山ノ如ク三年一度ノ參覲ト改ムベシトインカ如キ説ニ及ハサルヲ以テ見レハ隔年交代ノ古法ヲ維持セントスルモノノ如シ。

之ヲ要スルニ徂徠ハ參覲交代制度ニ基ケル所謂『旅宿仕掛ノ社會』ヲ改メンカタメ士民土着ノ法ヲ探ラントスルニ至リシモノニシテ前者ノ弊ト後者ノ利トヲ説クニ力メタリト雖、單ニ參覲交代制度改正ノ點ヨリ見レハ、ソノ所論ハ概括ニ過キテ具體化セサル所多ク寧ろ蕃山ノ説ノ徹底セルニ如カサル也。

(11) 同上、406-407頁

(12) 同上、380頁

三、室鳩巢ノ説。鳩巢ノ説ハ前二者ニ比シテ最モ保守的ニシテ參觀交代制度ノ改正ニ反對スルコト甚ダ大也。シノ意見ハ献可錄ニ就テ之ヲ徵スベシ。即チ曰ク

『諸大名參觀ノ格、只今迄ノ通ニテハ日本國ノ大名常ニ半分ヅツ在江戸仕候、諸大名モ大分ノ費用カ、リ反テ江戸困窮ニ罷成申候間、周世ノ格ニ準候テ何トゾ參觀ノ格改リ候様仕度モノニ候由先年老人共爲申聞候故、尤成儀ニ存候テ罷在候得共、其改様マテハ存寄モ無之候處ニ先日被仰出候通四番ニ仕、半ヅツ在江戸、一ヶ年半在國ニ相定候得者、在江戸ノ大名半ハ減申候。是ハ半憚御尤ナル御ツモリト奉存候、左様ニ罷成候ハバ江戸中格別人少物靜ニ罷成、風俗モシマリ候テ火災モ稀ニ可能成ト奉存候。右之通ニ兼テハ料簡仕罷在候得共、此度此儀被仰出候ニ付、乍憚天下ノ御爲ニハマリ候テ再三思案仕見申候處、此格ハ御改被遊ガタキ事ニ奉存候。(中略)慶長以後御當家ノ御威勢、別テ盛ニ罷成候故、天下ノ大名先ナ爭候テ江戸へ參觀相動申候、此時若末ノ御考モ御座候ハバ參觀ノ格今少御定被成候様モ可有之候處、御威勢盛リナルニ化セラレ、諸大名隔年ニ江戸へ參觀仕、一年ヅツ在府候様ニ大格ヲ御定被遊候、諸大名何レモ其格ニハマリ候テ今以少モ無滞交營正シテ相動申候、其上妻子等江戸へ罷在候故、何モ江戸安住ノ心ニ罷成、參觀タイササカ難儀ニモ不奉存候、是以併御威光ノ驗、安危ノ本、天下ノ形勢ニテ御座候。然ル處ニ只今參觀ノ格ニ改リ候ハバ天下ノ形相俄ニ輕ク罷成候、諸大名モ在江戸ヲ當分ノ様ニ意得候テ在國ノ處ヲ重ク可存候、然バ是モ外ノ事ト違候テ天下ノ御爲大切ノ儀ニ奉存候、但御先格ニ可被從候、少モ御イロヒ不被遊候儀ニ奉存候得共、其由又時節モ可有之儀ニ存奉候』⁽¹⁸⁾

是レ參觀ノ古法ヲ墨守スルコトノ幕威ヲ維持更張スル上ニツキ絶對ニ必要ナルコトヲ説ケルモノ也。而モ利弊相伴フハ常道ナリ、舊來ノ參觀交代ノ制度モ亦一面ノ弊アリ。何ソヤ諸侯ノ困窮ト江戸風俗ノ頹廢ト即チ是レ也。而シテ鳩巢ノ見ル所ヲ以テスレバ、コノ弊竇ハ江戸人口ノ膨張ヲ制スルコトニヨリテ之ヲ救済シ得ベシ。故ニ曰ク

『諸大名參觀ノ格ヲ改度ト申儀モ江戸チ人少ニ仕度トノ儀ニ御座候、自古泰平年久ク罷成候ヘバ次第ニ人多ク罷成候、唯人少ニ

(18) 日本經濟叢書第三卷、154-155頁、尙同叢書第二卷兼山秘策 515頁以下ニモ同様ノ意見アリ就テ看ルヘシ

又ハ事少ニ罷成候様ニ仕候事簡要ト奉存候、諸大名大身小身共ニ參覲ノ節國元ヨリ召連レ候人數、只今ヨリ三分一モ減候様被仰付可然奉存候、勿論道中并江戸廻召連候人數モ格別減候様ニ仕度候、諸大名モ參覲ノ節人少ニ召連候事自身ノ勝手ニモ宣敷儀ニ御座候。(中略)。只今江戸ノ繁昌、日本ニテハ古今ニ無之事ニ御座候、然ル處御城下ニ一同入込罷在候故、是程廣大ナル武藏野ニ候得共、尺寸ノ地モ残り不申人家ニ罷成候、其ニ遊民惡黨共其間ニ紛レ居申候故、中々仕置モ難仕□科人絶不申候、是ニ依テ奉存候ハ寄合組小普請其外無益ノ者共ハ江戸廻リ五里三里外入王子、葛西、戸塚、板橋邊ニ百人二百人程宛住居仕候様ニ罷成候ハバ末々商人ノ類モ其ニ付テ集リ可申候間御城下自然ト人少ニ罷成可申候、第一諸士勝手ノ爲ニモ宣敷、江戸ノ風俗モ改、又ハ大事ノ沙汰モ靜リ可申ト奉存候⁽¹⁴⁾。

今鳩巢ノ意見ヲ要約スレバ參覲交代制度ノ内容ヲ變更スルハ絶對ニ不可ナレトモ、従者ノ數ヲ減シ、且江戸人口ノ一部ヲ郊外ニ徙セハ以テ諸侯ノ困窮ヲ緩和シ、又人口過多ニ基ク弊害ヲ除キ得ヘシトイフニ在リ。

思フニ献可錄ハ鳩巢ガ幕府ノ諮問ニ答ヘタル政事上ノ意見ニシテ右ノ參覲交代ニ關スルモノモ亦モトヨリ然リト雖、將軍吉宗ハ遂ニ在府半年在國一年半ノ新制ヲ立ツルニ至リシ也。項ヲ政メテ之ヲ説カン。

四、吉宗ノ改革。 享保七年七月三日令⁽¹⁵⁾ シテ曰ク

一、御旗本ニ被召置候御家人御代々段々相増御藏人高モ從先規ヘ多ク候得共御切米御扶持方其外表立候御用筋渡方ニ引合候而ハ畢竟年々不足之事ニ候然共只今迄ハ所々之御城米ヲ廻サレ或ハ御城金ヲ以意テ辨セラレ彼是漸御取續之事ニ候得共今年ニ至テ御切米等モ難相渡御仕置筋之御用モ御手支之事ニ候夫ニ付御代々御沙汰候様ニ可被仰付ト思召候左候ハテハ御家人之内數百人モ御扶持可被召放ヨリ外ハ無之候故御耻辱チモ不被顧被仰出候。高。一。萬。石。ニ。付。米。百。石。之。積。可。被。差。上。候。、且又此間和泉守ニ被仰付隨分遂詮議納リ方之品或ハ新田等取立之儀申付候様ニトノ御事ニ候得共近年之内ニ難相調可有之候條其内年々上

(14) 同上、P55-156頁

(15) 憲教類典參覲部、享保令典永鑑御切米御足高之部、徳川禁令考四帙、516頁、徳川十五代史八編 82頁、徳川實記五卷 738頁

リ米被仰付ニ而可有之候依之在江戸半^〇年宛被成御免候間緩々^〇致休息候様被仰出候

何レモ在府之儀ニ付而ハ江戸人多ニモ候故兼而思召モ有之タル事候間此以後在府之間モ少キ儀ニ候條可成程ハ人數可致相減候

今度万石以上ヨリ米差上候儀并參觀之時節被遊御用捨被差延候越委細別紙被仰出候夫ニ付參勤御用捨無之面々又ハ御暇等不被下或當地在役之輩ハ米差上候儀被仰出間數思召候、然ルニ御勝手御不如意故ナリ米差上御用ニ立候儀ハ何モ可爲本意勿論ニ候、然上ハ縱雖爲在役之者一統被仰出候ニト年寄共達而相願候ニ付而難默止被思召、左候ハ米ニ而可差上旨被仰出候條參勤御用捨無之面々モ御暇等不被下輩一万石ニ付百石之割合三分一之積ヲ以可被差上候、右之趣可申聞冒被仰出候

一、參勤御暇之儀只今迄外様四月御譜代六月交替被仰付候得共、向後ハ一同二三月中九月中可被仰付事

一、嫡子御暇被下候者ハ其父在所到着以後六十日過可致參府候

一、在所又ハ居所有之面々ニテモ幼少若年之者エハ御暇被下間數候、併一年半ハ御暇之格ニ准シ御門番火之番等被仰付間數候尤半年ヅツ在府之格ニ而右御用等可被仰付事

一、上ケ米之儀大阪御藏エ成トモ當地御藏成共勝手次第上ケ米高半分ヅツ春秋兩度可被相納候事

但、米ニテ難成面々ハ金子ニ而其節張紙直段ヲ以可被相納候事

一、當年ハ上ケ米半分之積秋中可被相納候事

即チ右ノ令ヲ以テ在府年限ヲ半年トシ一年半ノ間國ニ就カシメ、之ニ對シテ若干ノ上米ヲナツシメタルモノ也。吉宗ノコノ改革タルヤ參觀交代制度ノ根本ヲ覆シ、若クハ封建ノ形勢ニ鑑ミテ積極的ニ社會組織ヲ改造センカ爲メナリトイフコリハ、寧ロ幕府財政ノ窮乏ヲ救ハンカタメニナセル消極的派生のノ改革ト看ルヘシ。⁽¹⁶⁾換言スレバ參觀交代制度ニ變革ヲ加フヘキ根本的必要ノ存スルコトヲ認メタルカ爲メニアラスシテ、諸侯ヨリ上米ヲ徴センガ爲メニ外ナラザリシ也。蓋諸侯

論 說

參觀交代制度ノ經濟觀(二)

第四卷 (第四號 六三) 五二九

ノ在府年限ヲ半年ニ短縮スルトキハ諸侯ノ費ス所、大ニ減省スヘキカ故ニ、一萬石ニ對シ百石ノ上米ヲ命スルモ諸侯ハ尙幾分ノ餘裕ヲ得ヘキノミナラス(註二) 幕府モ亦之レニヨリテ財政ノ窮乏ヲ緩和スルコトヲ得ヘキヲ以テ也。

(註一) 兼山秘策五二三頁ニ曰ク『報諸大名半年ノ詩ノ代リニ役銀出申圖ニ候ヘ共少分ノ儀ニテ諸大名ノ勝手ニハ莫大宜敷事共ニ候由ニ候』云々

初メ將軍吉宗ハ大名參覲ノ期ヲ三年一回若クハ五年一回トナサントノ意ナリシモ、鳩巢ノ意見ニ鑑ミ隔年交代ノ古法ヲ動サスシテ單ニ在府期間ヲ短縮セル折衷案ヲ實行スルニ至リシモノ也。⁽¹⁷⁾ 這間ノ事情ハ兼山秘策五一五―五二三頁ニ明カ也。サレハ鳩巢ノ諮詢ニ答ヘタル意見ハ其儘實現サレタルモノニハ非ス。吉宗ノ素志ト上米徵收ノ事實ヨリ考フルトキハ、ソノ形式ニ於テハ却テ蕃山ノ說ニ相近キヲ思ハスンハ非ス。吉宗ノコノ改革ハ未タ必スシモ政治上ニ懸念スヘキ事件ヲ生スルニ至ラサリシニモ係ハラス、約九年ノ後ニ及ヒテ之ヲ復舊スルニ至リシハ(註二) 祖法維持ノ思想牢乎トシテ抜ク可ラサルモノアリシニモヨルヘシト雖、復改革ノ原因カ參覲交代制度ソノモノノ本質ニ存セスシテ寧ロ之ニ隨伴セル他ノ事情ヲ處理センカタメニ行ハレタル敵本主義的ノモノナリシカ爲メナリシニモ因ルヘキ也。

(註二) 享保十五年四月十五日參覲交代制度ヲ復舊スルニツキ令シテ曰ク⁽¹⁹⁾

一、御勝手向不調ニ付近年上ケ米被仰付御用モ被辨御機嫌ニ御召候。右上ケ米之儀今年ニモ御用捨被遊被思召候得共、未御勝手向難相調候旨役人共申ニ付、從來年上ケ米被遊御用捨候。依之來年ヨリ參勤交替之儀可爲前々之通候。來年參府之面々ハ當秋參府時節可被相伺候其節可相達候

(17) 德川政教考上、180頁以下、德川時代史下、215頁

(18) 三上博士、前掲、42頁

(19) 憲教類典參覲部、享保令典永鑑儉約部、德川禁令考四帙 518頁、德川十五代史八編 143頁

右之通可申聞置之由被仰出候

但半年代リ之面々モ從來年可爲前々之通候以上 (下略)

五、白川樂翁公ノ説。

樂翁公ノ説ハ行政上ノ時務十數條ヲ論セル諫鼓鳥⁽²⁰⁾ニ出ツ。未タ精ヲ盡

シ、微ヲ穿テルモノニアラスシテ、頗ル簡略ナルモノナリト雖、行政ノ當路ニ立チシ人ノ意見トシテ之ヲ見ルトキハ、ソノ説自ラ儒者ノ言説ト異ルモノアルヲ看取セスンハ非ス。即チ曰ク

一、諸大名參覲ノ次第、在府三ヶ年在國三ヶ年、凡ソ三十年程ノ見渡シニテ先ツ行ヒ見度モゾ也。其上寄々計策モアルヘシ。

右三ヶ年ノ内格別ノ儉約被仰出、諸家ヨリ時服等ノ献上物其外時々献上モ右年限中ハ止メラルヘシ。

一、大名へ御門番被仰付候事尤モ不得已事也。サリナガラ右入用程ハ上ヨリ是ヲ可被下、夫モ御振合ニテ難成候ハハ右年限中ハ是ヲ下サルベシ。其外御音譜御手傳等ノ義モ暫ク御用捨有ベシ。

六、中井竹山ノ説。

樂翁公ノ説ニ比シテ論議ノ精細ヲ極メタルモノハ、竹山ノ草茅危言ニ説

ケル所ノモノ是レ也。即チ先ツ遠近勞逸ヲ均クスヘキコトヲ説イテ曰ク、

『乍去、先王ノ制道里ノ長短ヲ以、來朝ノ疏數ヲナシ、一歲ニ一度朝スルヨリ五歲ニ一度朝スルニ終ル、遠近ニ從ヒ勞逸ヲ均フスルハ左在可キ筈也。我邦ニテ江都へハ薩摩ヲ最遠シトス、海陸四百里ニ及ヘリ(中略)思へバ遙カナル者ニテ四五十里ノ諸侯ト同ク年々ノ往來ハ餘リ勞逸ノ均シカラメ事也。其上ニ大諸侯大勢ノ供廻ニテ歸國ハ何ツモ夏ノ旅行ナレハ、別シテ病人多ク牟々道中ニテ渴死ノ人定テ數人アリ(中略)年々死亡ノ人幾バクゾヤ。(中略)交代ノ事、今日ニテハ猝カニ變シ難キ事成ベケレドモ何卒制ヲ設ケ先王ノ法ニ從ヒ遠近勞逸ヲ均クシタキ者也。熊澤氏ノ書ニ、鎌倉ノ大名ノ參勤二年ニ一度五十日ノ在勤ヲ引テ今モ其通り成可シト論スレトモ、古ハ知ラス、是ハ今ニテ行ヒ難キコト、其上遠近勞逸ノ均シカラヌハ同ジ事ニテ眞法ニ非ス。今愚意ヲ以テ假ニ其制ヲ設見ンニ、三親藩ノ御事ハ本統ノ輔弼、國家ノ柱石、格別ノ御事ナレハ是テ如何在セラル可キ等野人ノ議ス可キニ非サレハ是ヲ置、其外ハ譬へハ江都迄五十里以内ノ諸侯ハ毎半參勤ニテ在府五十日成可シ。百里以内ハ二年

ニ一度參勤在府百日、二百里以内ハ三年ニ一度二百日、三百里以内ハ四年ニ一度三百日、三百里以上五年ニ一度九一年在府ト云樣ニ定メ其室家ハ前條ニ云如ク皆國ニ從ス可シ。斯ナリナバ諸侯ノ窮ヲ救ヒ、天下ノ民力ヲ舒メ、上下渾々トシテ太平ノ化ニ浴ス可キ事也。交代寄合ノ分ハ遠近ハ右ノ通ニテ度數ヲタテ、在府ノ日數右ノ在國ノ日數ト振替テ宜シカル可シ。是ハ都下ノ宿衛ヲバ事務ニアル可キ故也。此室家ハ今迄ノ如ク成ル可シ。萬石内外ノ定府無役ノ分モ交代寄合ニ准シテ折々ハ民ヲ親ミ、領知ノ政ヲ躬ラセサセラル樣ニアリタシ⁽²¹⁾』

カクノ如ク在府日數ヲ減少シ妻子ノ歸國ヲ許スニ於テハ自ラ江戸人口ノ減少ヲ生シ過昌ノ弊ヲ除キテ實昌ヲ來スノ基トナルヘシトイヘリ。然レトモ改革ノコトモトヨリ一日ニシテ行フ可ラス漸ヲ追テ之ヲ遂行セサル可ラス。即チ曰ク

『此事俄ニ施シ難ケレバ徐々ニ歲月ヲ積テ行フ可シ。先初令ニ遠キヲ先ンジ他ノ諸侯差置、三百里以上ノ分ヲ三年ニ一度ノ參勤ニテ一年在府二年⁽²²⁾在國トシ二三年ノ内ニ一時ニナラサル樣ニ追々入替ル樣ニシ其三年ノ後三百里内ノ分ヲ又三年一參勤ト右割合ニシテ其時初ノ三年一觀ヲ四年ニ一觀、三百日ノ在府トシ、又三四年ノ内二百里内ノ三年一觀ニ二百日ノ在府、前ニ云所ノ平均ノ本制ノ通ニシ、初ノ三年ハ四年ニ、四年ハ五年ニ、皆本制ニ從ヒ、又三四年ノ内二百里五十里ノ内皆本制ニ從ヒ、大抵十年以上十四五年迄ノ内ニハ殘ラス平均ノ本制ニナリ歲月ヲ經ル故目ニ立ズシテ事調フ可シ。擬諸侯重ニ隱居等ニ江戸好キト稱スル有テ此制ヲ好ヌモ多カル可シ、是ハ惡習ヨリ出タル事ナレドモ、其分ハ是迄ノ姿ニアリ度ト願ハルルハ其意ニ任セ、又外ニモ故有テ先今迄ノ通リト願ヒ立アル分又其通ニテ曾チ官ヨリ是ヲ強ズ、在府モ定リヨリ長ク在度トノ方⁽²²⁾是又其儘成可シ。全體諸侯ノ爲ニ宜キ事故、次第ニ合點行テ後ニハ心ヨリ甘從アル可シ。兎角強スシテ自然ト行ハルルヲ待テ妙トス⁽²²⁾』

竹山ノ論、理路頗ル整然トシテ而モ實行ノ要ヲ得タルカ如シ。然レトモ驕ヲ考フルニ近者統御シ易ク遠者離叛シ易キノ事情ニ至リテハ果シテ遠近勞逸ヲ均クスルノ趣意ト相抵觸スルコトナキヤ。抑モ當時ノ形勢ニ於テハ幕府ハ參觀交代ノ舊制ヲ勵行セストモ、ヨク諸侯ヲ統御スルニ足ル

(21) 日本經濟叢書第十六卷 303-304頁

(22) 同上、306頁

ノ實力ヲ有セシヤ否ヤ。竹山カ單ニ先王ノ制ニ據リテ遠近勞逸ヲ均クストイフノミニテ諸侯統御策トノ關係ニ説キ及ハサルハ、ソレ龍ヲ描キテ晴ヲ點セサルモノニ非ルナキ乎。

七、神惟孝ノ説。竹山ノ説ヲ窺ヒタルモノハ又同時ニ神惟孝ノ説ヲ顧ミサル可ラス。蓋惟孝

ノ草茅危言摘義ハ竹山ノ草茅危言ノ諸説ヲ批駁セルモノナレバ也。サレハ參觀交代制度改革ノコトニツイテモ亦反對ノ論陣ヲ張りテ駁撃スルコト頗ル努メタルノ感アリ。曰ク

『按スルニ江戸ニ諸侯ノ聚居スベカラズト云コト鳩巢ハデニ此説アリ、ヤヤ異ナリ、竹山ノミニアラバ、然ルニ是又余ガ上ニ論ズル如ク時勢ナリ、氣節也、遽ニ變スヘカラス、此ナモ變スルトキハ即チ國體ヲ擾ルニ至ル、國體擾ルルトキハ百害立ドコロニ生シテソノ禍測ルヘカラサラン。如何トナレバ諸侯參觀ノ制、偃武以來二百有餘年ニシテ今ニ至ルトキハ爾後千百世ト云トモソノ制度如此ニシテ宜シカラシノミ、然バ則チ何ソ遽ニ改メ易ルノ勢アラシヤ。余以爲ク國家ノ務ハ制度ニ非スシテ、タダ上ノ徳如何ニ有ノミ、然ルニ竹山ノ如キハ改ムベカラサルノ制度ヲ論シテソノ徳ニ及ハサルコト又異シカラズヤ』⁽²³⁾

トイヒ、更ニ參觀ヲ止ムルノ説ハソノ不可ナルモノニアリトス。即チソノ一ハ、

『夫二百五十餘年來因循シ、令セスシテ天下ノ諸侯皆江都ニ向フコト家ニ歸ルカ如シ然即チ官ニモ文徳ヲ修メコレヲ待セラレバ永世不易ノ盛事ナリ。然ルニ今之ヲ變スレハ此機ニ乘シテ不測ノ禍モ有ベキカ、且諸侯ノ江戸ニ向フノ心ヲ沮ム、ソノ不可一ツ也。』

ソノ一二曰ク

『諸侯各ソノ國ニ在トキハ平生ノ交ル所ミナ臣庶ノ類、使令ニ給ヘル人ノミ、然ラハ則諸侯各自ラ貴トシテ又君臣上下アルコトヲ知ラス、驕惰日々ニ長シ國ノ亡ニ至ラサルハ或ハ稀也。然ルニ諸侯ノ江戸ニアルヤ上ニハ方伯ノ恐レアリ、下ニハ同列諸侯ノ交リアリ、或正朔會賀大小ノ諸侯皆殿中ニ會シ森列威儀ヲナストキハ各位列等列ヲ辨ツ下遇ノ人ト雖トモ附越スベカワサルコトヲ知ルナリ。コレ封建第一ノ良制ニテ聖人又起ルトモ此法ヲ易テ封建ヲ制スルノ道ナカラン、……然ルニ一朝ニシテ真

(23) 日本經濟叢書第二十四卷 537-538頁

(24) 同上、538-539頁

制ヲ敗ラントス、ソノ不可ニツ也。』

ソノ二ニ舉クル所ヲ見ルニ

『諸侯逆旅ニ費ス所ニ多シト雖トモ、之ミナ下民ノ利ナリ然ルナ國ニ在テ驕奢淫佚ヲ縱ニシテ國中虚耗セハ之マタソノ害逆旅ニ擲ツヨリ甚シカラシ、此ソノ不可ナル三ツ也。』

以上ノ所論或ハ反對センカタメノ反對論ナルカノ如キ感ヲ生スル點ナキニアラス、又理論ノ整否ヨリ云フモ竹山ノ論ニ比スヘクモ非ルカ如シト雖、兎モ角、彼レハ鳩巢ト同シク參觀交代改正ノ不可ヲ力説セルモノニシテ、鳩巢ハ制度ニ伴フ弊害ヲ除却スル爲メニ從者ノ數ヲ制限スヘシト説キタルモ、惟孝ニ至リテハ即チ然ラス。絶對ニ現状維持ヲ主張セルモノニシテ最モ極端ナル保守論ト見サル可ラス。

八、松平春嶽ノ説。幕末外國關係ノ頻發スルニ及ヒテ國內上下騷然タリ。コノトキニ當リテヤ國防ヲ嚴ニシ、武備ヲ盛ニシ以テ國威ヲ更張スル所ナカル可ラス。而モ之レカ爲メニハ諸侯ノ疲弊ヲ救済スルコトヲ要ス。松平春嶽ガ安政元年二月晦日閣老阿部正弘ニ致セル建白書モ亦蓋コノ趣意ニ出ツ書中參觀交代改正ニツイテイヘルモノアリ。即チ左ノ如シ。

『(上略)當時諸大名國元在所ヨリ多人數召呼候勢ニ相成居候事故、日々ノ雜費不容易事ニ相成、國力疲弊ノ損害ハ御座候得共其益ハ無之、防禦ノ實用ニモ相成不申候。固メ人數差出候事ハ充實無此上奉存候間何卒陸秋モ及建白候通諸大名妻女國許へ被差遣年始ヨリ嚴密迄ノ進献物一切御止メ被成御役人方へノ贈物モ被止大名ハ三四年ニ一度ツツ幕府ニ相成候ハハ却テ幕府ノ御爲ニモ相成、諸侯ニテモ大ニ難有可奉存候儀ニ御座候、其他諸侯ノ難儀ニ相成候儀共ハ悉ク御省被成候様致度奉存候。何分諸侯之困弊ハ皇國ノ衰弱ニテ御大事至極ノ儀ト奉存候。御役人方ニテモ贈物無之候中テハ格別迷惑ニ相成候節モ候ハハ、其數ニ當

候程從公邊御手當被下候ハハ可然奉存候。唯今ノ御時態ニテ治務御放下モ無之諸侯參覲モ是迄ノ通りニテ蠻舶及渡來候毎度御
固メ等被仰付候様ニテハ御國威御挽回ノ御道ハ絶テ無之益以御厄運相迫リ可申奉存候其節ハ諸侯勞役ニ堪兼候處ヨリ如何跡之
野心相兆・申間敷トモ御受合難申上又心力ヲ盡シ精忠ヲ抽候諸侯モ毎々ノ勞役ニテ國ノ虛耗ノ處ヨリ可奉救助事難相叶時勢ニ
相迎ヒ可申ハ眼前三候。何卒右等ノ處被召召詰候ハハ一刻モ早ク諸侯ト御盟約ノ上治務御擲却專ラ金革之務ニ相成不申候半テ
ハ逆モ々々御威光御恢復御見詰無之ト奉存候』(下略)

即チ參覲交代制度ニ改正ヲ加ヘ、以テ諸侯ヲシテ専ラ力ヲ國防ニ致スコトヲ得セシムルニ非スン
バ、内ニハ幕府ノ解體ヲ生シ外ニハ國威失墜ノ悲運ニ會スルコトナシトモ限ル可カサルコトヲ説
キシモノナルガ、而モコノ意見ハ未タ幕府ヲ動カスニ至ラサリシコトハ安政元年三月四日正弘ノ
答書ニヨリテ之レヲ知ル可キ也。即チ曰ク

(前略)『御書問之内諸侯妻女ヲ國許ヘ差遣シ三四年程ニテ參勤ニ申儀至極之儀ニ候得共、此儀ハ何分如何可有之歟、愚存ニテケ
様ニハ難相成事哉ニ奉存候』云々

九、横井小楠ノ説。小楠カ文久二年幕府ニ對スル七ヶ條ノ建言中ニハ『止諸侯參覲爲述職』ノ
一項アルモノノ内容ハ未タ明カナラス。⁽²⁷⁾然レトモ安政二年十一月三日ニ筑後柳川藩ノ家老立花壹
岐ニ答フル書中ニハ⁽²⁸⁾

一、諸大名家屋一切破却在府中小屋住居ノ事。

一、諸大名以來ハ一年ニ百日之在府ニテ往來ハ出陣之格ニテ參勤之事。

ナルコト見ユルノミナラス、中根雪江日錄採記文久二年八月二十七日ノ條ニハ小楠カ參覲交代
ニ關シテ答問セルモノアリテ同一ノ意見ヲ把持セルコトヲ知ルヘキ也 即チ左ノ如シ。

論 說

參覲交代制度ノ經濟觀(二)

第四卷 (第四號 六九) 五三五

(25) 濱野章吉、懷舊紀事(阿部伊勢守事蹟)附錄 122-123頁
(26) 濱邊修二、阿部正弘事蹟、779頁
(27) 小楠遺稿、102頁、幕府ニ建言七條
(28) 小楠遺稿、146頁
(29) 同上、374頁

問『諸侯ノ參覲ヲ弛メ候義ハ是迄モ評議有之候得トモ未タ事情ヲ得ス候。如何ノ振合ニ相成ヘキ物カ』

答『參覲ヲ被止候テハ重ネテノ參覲六ヶ數可相成候エハ遞職ニ被代百日計モ在府日々登城國政向等申談候様ニ相成候ハハ公邊

御趣意モ貫通可致、右ニ付而者妻室モ國住居御免ニ相成可申且又無益之戍兵ハ解免可然候』

由是觀之諸侯一年百日在府トシ妻子ノ歸國ヲ許サントスルコト其主旨ナルカ如シ。而シテ小楠ノ

說ト春嶽ノ意見トハ共ニ文久二年ニオケル改革ノ實施ニ少カラサル關係ヲ有スルモノトス。

一〇、文久二年ノ改革。 文久二年閏八月二十三日遂ニ參覲交代制度ニ一大變革ヲ加フ。⁽³⁰⁾

『今度被仰出候趣モ有之候ニ付參勤御暇之割別紙之通可被成下旨被仰出候。就而者在府中時々登城致シ御政務之理非得失ヲ始存付候儀モ有之候ハ十分ニ申立且國郡政治之可否海陸防禦之籌策相伺或ハ可申達又ハ諸大名互ニ談合候様可被致候。尤右件々御直ニ御尋モ可有之事。

別紙

一、在府人數別紙割合之通被仰出候得共御暇中タリ共前條之事件或ハ不得止事所用有之出府之儀ハ不苦候事。

一、嫡子之分ハ參府在國在邑共勝手次第之事。

一、定府之面々在所エ罷越候儀願次第御暇被下候。尤諸役當之儀ハ別紙在府之割合ヲ以可被仰付事。

一、此表ニ差置候妻子之儀モ國邑エ引取候共勝手次第可被致候子弟輩形勢見分之爲在府爲致候儀是又可爲勝手次第事。

一、此表屋敷之儀留守中家來共多人數不及差置參府共族宿陣屋等之心得ニ而可成丈手輕ニ可被致且軍役之外總而無用之調度相

省家來共之儀ハ供先使者勤共族裝之儘罷在不苦事國許在所ヨリ懸隔候場所御警衛之儀ニ付而ハ追而被仰出品モ可有之事。

一、年始八朔御太刀馬代參勤家督其外御禮事ニ付而之献上物ハ是迄之通タルヘク候。乍去手數相應候品ハ品替相願不苦事

一、右之外献上物ハ都而御免被成候尤格別之御由緒有之献上仕來候分ハ相伺候様可被致候事。

在府之割

來亥年

尾張大納言殿

當戌年

水戸中納言殿

來子年

紀伊中納言殿

諸大名參觀割合

三年目ニ大約百日ヲ限リ在府但松平美濃守宗對馬守松平肥前守者大約一ヶ月ヲ限リ在府

三年目ニ一年宛在府

大廣間席面々 溜詰 同格

三年目ニ大約百日ヲ限リ在府

御譜代大名 外様大名 雁之間詰

御奏者番 菊之間様類詰 交替寄合

コレヨリ前、内外ノ關係頗ル急迫トナリ、開國ノ機運ハ遂ニ熟シテ米英露蘭各國トノ通商條約ノ修訂トナルニ至リシモ、尊王攘夷ノ論愈盛ニシテ幕威已ニ衰頽シ内憂外患益甚シ。文久二年七月松平春嶽ハ勅命ニヨリ政治總裁職ニ補セラレテ幕政ニ參與シ、横井小楠亦春嶽ノ顧問ニ具ハリシガ、同年閏八月遂ニ三年一觀百日在府ノ新制ヲ發スルニ至リシモノ也。蓋春嶽小楠等ノ抱懷セシ意見ガコノ改革ニ對シテ大ナル關係ヲ有セシコト明カニシテ二氏ノ説ハ必ズシモ『無用ノ辨トナリ了リ』⁽³¹⁾シモノニハ非ル也

五、參觀交代制度ノ弛廢

既ニ述ヘタルカ如ク參觀交代ノ制度ハ未タソノ確定ヲ見サル間ニ於テ既ニ早ク一般諸侯ノ間ニ行ハルルニ至リ、交通困難ナル當時ニ於テ嚴ニ勵行セラレタル所以ノモノハ幕府ノ力ヨク諸侯ヲ統御壓服セシムルヲ得タルカ爲メナラスンハ非ル也。然ルニ幕府ノ勢威衰フルニ及ンテ漸ク弛憚ノ色アリ。天保ノ頃參府ニ後レ或ハ御暇ヲ得テ尙歸國セサルモノ少カラサリシガ如キ這間事情ノ一斑ヲ示スモノトイフベキ也。思フニ參府就封ノ時期ヲ勵行シ、病氣滯府ニツキ制限ヲ加ヘ或ハ取締ヲ行ヒシカ如キハ徳川中世ノ頃ニ於テ既ニ其例アリト雖、而モ天保十二年九月ノ令ト對比スレハソノ間自ラ事情ノ差異ヲ見ルニ足ルモノナクンハ非ス。天保ノ頃ニ於テ參觀ノ制少シク紊レシ跡ノ存スルニトハ之ヲ否ムヲ得サル也。ソノ令ニ曰ク

『參勤ノ面々病氣ニテ定例參勤時節ヨリ延引且御暇被下候モ病氣之由ナ以テ滯府ノ衆多候ニ付、是迄度々及尊候次第モ有之候處近年別而滯府被相願候衆多其内ニハ久々在所ヘ不被越并參勤延引之輩モ有之候。病氣無據事トハ乍申先可成丈其定例ノ時節參勤致シ且滯府無之様被心懸、押テモ旅行可成様體ニ候ハバ相越候様寄々可被咄出置候。但是迄病氣等ノ申立ニテ參勤延引致且病氣願候様體相尋候上願之通り被仰付候様合モ有之候へ共、以來ハ其次第二ヨリ御沙汰之品モ難計候此段ハ申達候品ニハ無之候得共爲心得噂ニ及候』⁽³²⁾

其後幕末ニ及ンテ幕府ノ威權益振ハス、諸侯ノ疲弊愈加リ而モ外ニハ黒船ノ來航アリ。乃チ海防ヲ嚴ニセンカタメニハ先ツ諸侯ヲシテ軍備ヲ充實スルノ力ヲ有セシメサル可ラス。而シテ之レカタメニハ參觀交代ノ制度ヲ改革スルコト其一手段タル可シ。阿部正弘ノ閣老タリシ當時ニ於テハ春嶽ノ意見モ祖法ハ枉ク可ラストノ一言ノ下ニ願ラレサリシト雖、ヤカテ春嶽ノ政治總裁職ノ任ニツクニ及ンテ遂ニ前述セル文久二年ノ大變革トハナリシモノ也。春嶽ノコノ改革ハ當時ノ諸

(32) 武家法度ニハ時期ヲ守ルヘキコトヲ命セルモノ多シ、尙徳川實記五篇 1146頁享保二十年七月二十八日ノ條、寶曆令典永鑑十五卷及徳川禁令考四帙 521頁ニオケル延享元年六月ノ令、靈教類典大名部延享四年ノ令等ヲ參看セヨ

(33) 前掲、日本法制史、269頁、續徳川實記三編 205頁

侯ノ狀況ト幕府ノ實力トヲ慮リ、諸大名自ラ制度ヲ守ラス參覲ヲ實行セサルニ至ランヨリハ寧ロ機先ヲ制シテ幕府ヨリ改革シ以テ實行シ得ヘキ程度ニ於テ制度ノ形骸ヲ存セントセシガタメナリト雖、享保七年ニ於ケル如キ制度ノ勵行セラレオリシ際ニオケル改革トハ自ラソノ事情ヲ異ニシ、既ニ弛廢ノ勢ヲ萌セシ後ニ於テ行ハレタルモノナリシカ爲メ、將ニ覆ラントスル大廈ハ到底一木ノ支エ得ヘキ處ニアラス、却テ馬ヲ急坂ニ驅リシカ如キ狀トナリ、制度ノ廢滅ヲ速カナラシムルニ至リシハ蓋時運ノ然ラシムル所トイフヘキ也。

之ヲ要スルニ參覲交代ノ制度ハ三百諸侯ヲ統御スルカタメニ行ハレ、又ヨクソノ目的ヲ達スルニ足リシモノナリト雖、ソノ然ル所以ノモノハモトヨリ幕府ガ之ヲ勵行スルノ實力ヲ有セシカタメニ外ナラス、故ニ一度幕府ノ權勢衰フルト共ニ之レヲ嚴守セシムルコトノ困難トナリシハ自明ノコトトイフヘク、又諸侯カ次第ニ疲弊スルニ及ンテ失費ノ甚シキノ制度ノ下ヨリ免レントスルコトモ亦當然ノコトト見サル可ラス。サレハ幕府ノ末葉ニオケル權勢ノ衰頽ハ最早諸侯ヲ壓スルニ足ラス、從テ又コノ制度ヲ維持スルヲ得サルノ勢ヲ呈シツツアリシ也。然ルニ此際ニ及ンテ俄然對外關係ヲ生シ、コノ方面ヨリシテ國防ト軍備ノ充實トヲ必要トスルニ至リ、對内關係ノミニ着目シ對諸侯策ノミヨリ割リ出サレタル參覲交代ノ制度ハ時勢ノ樞要ニ應スル所以ニアラス、日本國ヲ一團トシテ外ニ對スルカ爲メニハ、一幕府ノ安固ノミヲ計リテ諸侯ノ疲弊ヲ意トセサルカ如キ制度ハ之ヲ維持スルコトヲ得サルニ至リ、制度改革ノ必要ハ更ニコノ方面ヨリシテ一層ノ緊迫ヲ加フルコトトナリ、遂ニ内外ノ事情相乘シテ制度ノ破壞ヲ生セシモノトス。サレハ『權勢

(34) 三上博士、前掲、44頁。尙前掲セル春岳ノ意見書ニ於テモコノ主旨ヲ看ルニ足ル

ノ衰退ハ弛廢ノ原因ニシテ黑船ハ其機ナリ⁽⁸⁵⁾』トイヘルハ當レリ。換言スレバ外國關係ノ發生ハ制度ノ破壞ヲ一層速カナラシメシモノニ外ナラサル也。

然レトモ三百諸侯ヲ統御操縱シ得ルハ卽チ徳川幕府ノ存立シ得ル所以ニシテ、之レカ破壞ハ卽チ幕府ノ破滅トイハサル可ラス。故ニ時日ノ先後ヲ以テ論スルトキハ參覲交代ノ制度ハ幕府未タ亡ヒサルノ前ニ於テ弛廢シタリト雖、幕府ノ實力ハ既ニ早ク參覲交代制度ノ廢頓ト共ニ滅失セルモノニシテ此制度ト幕府トハ相終始シテ離ル可ラサル關係ヲ有スルモノナリトイハサル可ラス。

(85) 前掲、日本法制史、270頁